

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2010年1月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.35 「マイナスの要素で演出」

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお付き合い下さい。

ニュースでは連日、日本航空の再建問題が頻繁に伝えられています。どうやら法的整理が決定したようです。このメールセミナーが届く頃には、会社更生法の申請がされているのでしょうか。この事例から「感情の論理」を学ぶことができます。今日は、それをシェアしたいと思います。

企業年金の減額問題で、OBの3分の2が減額に同意したというニュースが流れました。期限最終日の決着です。当初、OBの反発は強く、3分の2の同意は困難と予想されていたのですが、急転決着をすることになったのです。

前原大臣は、会見で「OBの皆様の企業存続を願う愛社精神の賜物であり、敬意を表します」とコメントしていましたが、それを額面通りに受け取る人はいないでしょう。では、なぜ、OBは同意に傾いたか。

日本航空の法的整理の活用方針を固めた政府と企業再生支援機構の日航再建計画の大枠が、10日までに明らかになった。

提携交渉中の米航空会社の出資は受けずに事業提携にとどめるほか、通常運航に支障が出ないよう、政府が全面的にバックアップする。企業年金の減額で退職者（OB）の同意が得られない場合は、年金基金を解散させる方針だ。19日をめどに会社更生法を東京地裁に申請するが、政府や支援機構は関係者らとの事前調整を急ぐ。

これは10日にマスコミが一斉に報道した記事です。この中の「年金基金の解散」がOBの危機感を煽り、減額同意に傾かせました。基金が解散されると減額幅は60%になり、現行提案30%の倍になってしまいます。それだけは回避したいとの思いが、駆け込み的同意の原因です。人は、プラスの要素よりもマイナスの要素に反応する性質を持っています。

「○○を買うと、こんなにお得ですよ」と訴えるよりも、「○○を買わないとこんなに損をしますよ」と訴えた方が購買量が増えるというのは広告業界の常識です。誰もが損をすることは避けたいという心理を

持っているのです。

マスタービジネスの基本はここににあります。

我々はプロとして、子供たちの未来に待ち受ける落とし穴の存在を知っています。それを正しく伝え、理解してもらうことで危険回避の方法を「買ってもらふこと」ができます。

例えば次のような事例です。

同じ高校に進学した生徒は、基本的に同じ学力レベルのはずです。しかし、3年後には偏差値70の大学に進む者もいれば、偏差値40の大学しか受からない者もいます。その大きな差はどこで生まれるか・・・そう、入学当初に最も大きな分岐点があります。志望校に合格したことで浮かれ、勉強がおざなりになった生徒が落ちていきます。その中で最も始末が悪いのがトップ校に進学した生徒です。彼らは悪い成績を取った経験がないので、最初の試験で悪い順位を取っても危機感がありません。「ちょっと失敗しちゃったな。でも、ちゃんと勉強すれば次からは大丈夫。」と高を括っています。ところが、それほど高校の勉強は甘くありません。油断しているうちにズルズルとぬかるみに陥り、ついには抜け出せなくなってしまいます。高校3年間で最も大切な時期は、最初の3ヶ月なのです。

以上の話は、塾関係者なら同意していただけることだと思います。しかし、保護者・生徒は知りません。ならば、それを伝え、理解してもらうことで、高校部への継続を促すことを考えるべきです。

自塾の高校部の素晴らしさ（プラスの要素）を訴えるだけでは商品購入につながりません。高校部に継続しなかった時の危険（マイナスの要素）を知らしめることが重要です。

上記の話に続けて、「だから、3ヶ月だけでもいいので継続通塾して下さい。その上で、塾を利用しなくても大丈夫と確信した時には、どうぞ、退塾してください。喜んで送り出します。」とお勧めすれば、高校部への継続率は格段に向上するでしょう。

これからの塾は、高校生の獲得が鍵を握ります。新年度からは高校部の充実を是非、図って下さい。

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2010年1月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouku.co.jp/>

業界
TOPICS

vol.10 「コストダウンしておかないと大きな脅威に捕らわれる」

今回は、コストダウンの事例と広報戦略などを検証してみたいと思います。コストダウンと内部改革をしておかないと、内外部の様々な危機に迅速な対応をすることができなくなります。

(塾名は全て匿名とさせていただきます)

改革は資金の問題ではなく、工夫と努力次第

A塾

「コピーのメンテナンスで、社員ができることは全て社員がやることに加え、外部各社から見積もりをとって一番サービスが良くて安いところと一年契約にした」

B塾

「意識改革のため、各社員が所持している文具を記録させ、同時にダイエットメモも習慣づけたら、社員の平均体重が減った・
・何か良いことあるかも」

C塾

「節約と秘密主義の禁止で、パソコン一台を二人の社員で共有。無料と割引戦略の渦巻く中、チラシで同調してはいけないと思い、一年間限定の半額記念入会を企画したら好評」

D塾

「予算の関係でDM辞めて、エリア絞り込んだチラシとテレビCMだけに。現場からは節約するからDM復活して欲しいと言われ迷っている」

E塾

「良いとこ取りの親が増えたので講習は無料にしないが在塾生のサービスUPには努力している。アニメの時間枠でCM流したらかなり有効だ」

F塾

「中下位層獲得のため、低学年主体で新たに『マネび』コースを設置。基礎学習の習慣づけまでつなげたい。器が小さい子供を対象とした塾指導で、どんなスタイルがふさわしいか模索中。テレビではラジオのCMで経費節約」

G塾

「不景気の影響で地方の駅前テナントが安いので、この機に乗じて人的資源も含めて大規模校を開校し、集約的なビジネスを実現したい。新しい雰囲気や五年間はうまくいけるかも。変わり身を大事に、時代に合ったサービス提供で生き残る。本部機能も集中させて無駄を無くす」

H塾

「新規は出さずにリニューアルで内部充実を図ると同時にHPの質を高めて口コミ入会率を高める。学校格差で荒れている学校を見分ける調査が必要」

I塾

「福利厚生予算を減らして各社員の手当を増やして、結果的にコストダウンと社員満足度がUPした。月謝維持だからこそ内部改革が必要。指導も中身が勝負なので、学力UPのため担任による生徒管理を、管理ソフト導入して徹底目指す」

総括

月謝値上げなどできない時代だからこそ内部充実が必要。新しいことよりも当たり前のことをどこまでやるか、原点回帰でやりきる意識改革が最優先課題となります。ただし、身の丈に合った経営をしないと無理と無駄が生じます。某塾は「拍手ではじまり拍手で終わる」授業にしたなら、「経費のかからない顧客満足度向上」が実現できたと言います。改革は資金の問題ではなく、工夫と努力次第のようです。

歴史に学ぶ。

< 日米の架け橋 浜田彦蔵 >

「破船遭難」というタイムマシン

ジョン・万次郎とジョセフ・ヒコをはじめとして、幕末に漂流者が、開国の前後に外交交渉や貿易で果たした役割は、実に大きいものがあります。まさに生死の境をさまよう漂流において、米国や英国、ロシアなどの捕鯨船や軍船に救われた彼らは、「祖国への帰国」を念願しつつも、モリソン号事件に例を挙げるまでもなく、「外国船打ち払い令」や「キリシタン禁令」により、容易に帰国は叶いませんでした。

土佐の漁民の中浜万次郎は15歳で漂流し、米国の捕鯨船に救助され、ハワイのあと米国ニューベッドフォードに渡り、学校教育を受けて長崎に帰国し土佐藩に雇われましたが、これは奇跡に近い事例であり、ほとんどの場合は帰国を断念せざるをえませんでした。

彦蔵と一緒に遭難した十数人の日本人は、彼と二人は米国に、それ以外は香港や上海で、同じ漂流民でその土地に住み着いた日本人の助けを受け、幸運にも帰国できましたが、それを彦蔵が知ったのはかなり後になってからでした。

通訳として帰国

米国で父親代わりの米国人に実の息子のようにかわいがってもらい、教育を受け仕事を覚えた彦蔵は、洗礼を受けて帰化し、ジョセフ・ヒコという米国籍を得ました。そして、1859年に米国領事館付通訳として遂に念願の帰国を果たすのです。幕府との外交交渉の際には、米国側の通訳として米国公使ハリスのために働きました。九年の間に激変した自分の立場を、受け入れなければならない彦蔵の頭は混乱していましたが、船乗り仲間だった伝吉も同様で、英国の通訳として帰国していた伝吉はプレッシャーに耐え切れず、いつしか傲慢さで憂さを晴らすようになり、それは周囲の反発を買い、攘夷論者たちの刃にかかり果てました。

三人の米国大統領との面会

米国滞在中に彦蔵は、第14～16代のフランクリン・

ピアース、ジェームズ・ブキャナン、そしてエイブラハム・リンカーンという米国の歴代大統領三人と面会していますが、これも奇跡的なことであり、政治的に利用しようとした議員もいましたが、彦蔵にとっては貴重な体験となりました。また、リンカーンに会う前後には、南北戦争で騒然となっている現場にも遭遇し、「国家が内部分裂したら大変なことになる」ということを実感しました。

二つの祖国

彦蔵は、米国に帰化したことから、郷里で過ごしても受け入れてもらえず、二度も米国に戻りました。そして、親代わりとなっていた、サンダース夫妻のもとで米国人として暮らしつつ、三度日本に帰国しました。二つの国を行き来したことで、彼は英字新聞の発行を思いついたり、貿易の重要性を見出して長崎や横浜で武器や雑多な商品の輸出入に関わったりしました。また、明治政府の重臣に知己が多く、様々な助言をしたり実際に新しい試みに参画したりしました。

しかし、最後まで心やすらくことは無かったようです。船乗りの少年が初航海で遭難して漂流し、米国船に救助されてハワイからサンフランシスコ、そして香港から澳門へと、まるでタイムマシンに乗せられて、一気に未来世界を見せられた彼は、浦島太郎のごとく戸惑い、時代の波にもまれ、自分の生き方も迷走していたようでした。晩年結婚しましたが子供はいませんでした。

もし彼が日本の教育に関わっていたら、どうなっていたのでしょうか……。

取材/記事 : 新教育産業監修・月刊私塾界記者 千葉誠一

浜田彦蔵(はまだ・ひこそう、1837~1897)

別名「アメリカ彦蔵」幕末明治の漂流者、通訳。新聞発行者。兵庫県出身で、幼名は彦太郎。1850年の初航海で漂流、米国船オークランド号に発見・救助される。1858年にカトリックの洗礼を受け、米国に帰化し、ジョセフ・ヒコと称した。翌59年、米国神奈川領事館付通訳として帰国、幕末の日米間の外交交渉で活躍した。領事館を辞めた後、日本初の英字新聞を発行し、「新聞の父」と呼ばれる。横浜や長崎で貿易に携わり、1872年には大蔵省に出仕、渋沢栄一の下で国立銀行条例の編纂に従事。著書に「アメリカ彦蔵自伝」「漂流記」がある。文中記事は、吉村昭「アメリカ彦蔵」(新潮文庫)から引用。

ご意見・ご要望をお待ちしています。知りたい「テーマ」や内容などについて教えてください。
できるだけ対応したいと思っています。 ご連絡はこちらまで: magazine@chuoh-kyouku.co.jp